

理想・生き方に影響を与えた人物モデル

家 島 明 彦

はじめに

我々は人生において数多くの人と実際に出会い、多様なライフストーリーに触れることができる。また、我々は幼少期から絵本、マンガ、アニメ、小説、ドラマ、映画といった様々なメディアを通じて数多くの多彩な物語（ストーリー）作品に触れ、幾多の魅力的な人物と出会うことができる。身近な他者との「直接的な出会い」も、メディアを通して知る他者との「間接的な出会い」も、ともに人生においては非常に重要である。なぜなら、他者との出会いは特定の視点、価値観といった認識枠組を提供するだけでなく、自己啓蒙を促す感化の契機となりうるからである。また、他者との出会いは結果的に自己に関する知識をもたらし、自己に対する理解を深める。言い換えれば、「様々な他者の存在と、その他者の特徴を知ることによって、たとえば背が高い・低い、賢い・愚か、速い・遅い、美しい・醜いなどの自己をとらえる様々な基準を知るようになる」（水間、2002）のである。ここでは特に、他者との出会いの中で生じる感化に着目し、他者の中でも人物に焦点を絞ることにする。なぜなら、自分以外の人物に感化されることは、主体的な自己形成を求める意識につながるからである。

また、「人のふり見て我がふり直せ」という諺や、「人を以って鏡と為す」（墨子）という故事成語があるように、古来より人は他者の言動を見て自分の言動を省みるという方法で、自らを正しい方向へ導こうとしてきた。「Do as you would be done by.」（新約聖書）や「己の欲せざる所を人に施すことなかれ」（論語）といった類の言葉は古代ギリシャにおいてアリストテレスも述べているが、これらの言葉は他者のネガティブな言動を回避対象として理想自己に取り入れることを促しており、他者が模範または反面教師とするべきモデル的存在として捉えられていることがわかる。このように、他者が個人の理想・生き方に影響を与える存在であることは明らかである。

では、どのような人物が実際に個人の理想・生き方に影響を与えているのだろうか。若者にとって行動や生き方のモデルは、多様化しているとも、なくなってきているとも言われている現代において、この点についての検討の余地は少なくないと思われる。しかし、理想・生き方に関する心理学研究（例えば、理想自己の研究）においてそのような模範または反面教師とするべき自分以外の存在について調査した研究は少なく、誰が（何が）理想や生き方に影響を与えているのか明らかにした研究はほとんど見られない。従来の理想・生き方に関する研究は現実とのズレ、あるいはその内容に焦点が当てられていたが、現代は「共通の価値観に大きな揺らぎが生じており、望ましい生き方、あるいは理想の生き方を語る事がむずかしい状況」（渡辺、2000）である。

故に理想・生き方の背景 (background) に焦点を当て、「実際に影響 (感化) を受けた人物」という具体的なところからボトムアップ的にアプローチしていくことは、現代における理想・生き方について考えていく上で、得られる知見としても方法論としても有用であると思われる。

そこで本研究では、理想・生き方の面で感化を受けた人物に着目し、理想・生き方の問題と深く関わる時期である青年期 (大学生) を対象として、人がどのような関係にある人物から理想・生き方に影響を受けているのか検討していくこととする。

1. 問題

1-1. 本研究における他者の捉え方

本研究が焦点を当てる理想・生き方に影響を与えた人物とは、理想・生き方という自己の一側面を形成する「契機」となった他者であり、メディア・架空の人物を含めた他者である。自己の発達、形成における他者の重要性については、他者との相互行為の中で自己が形成されると考える社会学的自己論 (e.g., Cooley, 1902; Mead, 1934) や自己物語論 (e.g., 浅野, 2000; Gergen & Gergen, 1983) においても述べられているが、そこでの他者とは相互行為の相手としての他者であり、反応を返してこない他者であるメディア・架空の人物は見逃されがちである。一方、観察学習やモデリングにおける他者は学習・模倣の目標である以前に「契機」であり、相互行為を必要としないのでメディア・架空の人物も含まれることから、他者の位置づけが本研究に近いと思われる。理想・生き方に影響を与えた人物が必ずしもモデリングのようにそのまま到達の「目標 (goal)」となるとは限らないように、本研究と社会学的学習理論が必ずしも合致するわけではないが、少なくとも他者の捉え方という点において本研究と社会的学習理論には共通点があるように思われる。そこで本研究では観察学習やモデリングで有名な社会的学習理論 (e.g., Bandura, 1971; Miller & Dollard, 1941) に基づいて他者の役割を捉えることにする。すなわち、人間は自己にとって有意義な周囲の人々の行動を模倣することによって自己を形成していく (Miller & Dollard, 1941), あるいは、人間は他者を見ることによって価値観・行動様式に影響を受け、自己を形成していく (Bandura & Walter, 1963) という考え方に則り、他者を「感化の契機となるモデル的存在」として捉える。本研究における他者とは、自己形成契機としての他者であり、他者の役割は感化の契機となって自己形成を促すことである。

1-2. 「影響を与えた他者」という視点

理想・生き方に関する心理学研究は数多く存在する。しかし、理想に関する研究においても、生き方に関する研究においても、影響を与えた他者について検討した研究はほとんどない。

理想に関する先行研究

理想に関する心理学研究として、理想の自分、すなわち「理想自己 (ideal self)」(Rogers, 1959) についての研究が挙げられる。理想自己の研究は数多くなされてきた (e.g., Higgins, 1987; Markus & Nurius, 1986; Ogilvie, 1987)。まとめると、「理想自己」は、現実自己と理想自己の不一致 (差異スコア) と適応に関する研究を経て発展してきたが、理想自己の内容や質的な差異の検討によって、理想自己と義務自己の概念、正の理想自己 (なりたい自己) と負の理想

自己(なりたくない自己)の概念が誕生し、研究が行われてきている(遠藤, 1991; 山田, 2003)。理想自己研究における注目すべき点は、適応の面で考えられていた理想自己が、個人の目標としてとらえられ始め、正・負を含めた理想自己が青年期の発達課題と関係している可能性が示されたことであろう。しかし、理想自己に影響を与えた他者について調べた研究はほとんど見られない。

生き方に関する先行研究

生き方に関する過去の心理学研究では、「人々は生き方にどのような理想を抱いているのか」、「人々はどのような生き方を望み、実際にどのような生き方をしているのか」という「生き方」のカテゴリー化や概念化の研究が中心になされてきた。Morris (1956) は、人間の生き方の基本的要素として13の生き方のタイプを基本的なものとして設定した。この生き方の13類型を元に、日本でも大学生を対象とした人生観や価値観といった様々な「生き方」に関する研究がなされてきた(e.g., 安藤, 1967; 國吉, 2000)が、どれも内容に関する研究であり、影響を与えた他者を検討したものではない。

その他の先行研究

「影響を受けた他者」という視点は、教育学などの領域において多少見られる。『現代教育科学』37巻7号(1994)において、「人間としての生き方」を学ぶ上で何から影響を受けたか、という特集が組まれており、小・中学校の教師が「家庭からの影響」、「教師からの影響」、「書物からの影響」、「テレビ・新聞からの影響」についてそれぞれ検討している。速水・陳(1993)は、中学生から大学生までを対象に、深く感動して心に印象強く残り、生活の励みになっているような話や言葉の出所を、「家族、先生、友人、本・新聞・テレビ(マスコミ)、その他」に分けて質問し、中学生、高校生、大学生ともに「本・新聞・テレビ」が一番多かったことを報告している。大野(1995)は、高校生に「同じような行動や生き方をしてみたい」と思った人(大野は以下「生き方のモデル」と呼んでいる)を3人以内でたずね、本人との距離の点から、(1)家族・親類、(2)友だちなどの身近な人、(3)スポーツ選手などのその他の実在の人、(4)実在でない人に分類している。これらの研究は、青少年が理想や生き方の面において他者から感化された経験があることを示している。

これらの研究を踏まえ、本研究では回想形式でこれまでに理想・生き方の面において感化を受けた人物を挙げてもらい、理想・生き方に影響を与えた人物が誰なのかを明らかにする。「影響を受けた他者」という視点を導入し、誰に影響を受けたかを問うことは、理想・生き方に関する従来の心理学研究に対して新しいアプローチの仕方を提供することになる。また、青年の価値観形成に影響力を持っているものを同定することは、「生き方」モデルの喪失(渡辺, 2000)の問題の再検討を可能にするため、現代の青年問題を考えていく上でも意義があると言えよう。

1-3. 本研究における「影響を与えた他者」 : 「理想・生き方に影響を与えた人物」

本研究では「理想・生き方に影響を与えた人物」を2つの軸から4つに分類してそれぞれ測定する。1つ目は、他者との出会いのタイプという観点からの「直接-間接」という軸であり、「身近な人」と「メディアを通して知った人(見たり聞いたり読んだりした人、作品中の登場人物)」に分けられる。2つ目は、感化を受けた人物のタイプという観点からの「模範-反面教師」

という軸であり、「こうなりたい」人物と「こうはなりたくない」人物に分けられる。

「直接—間接」という軸：「身近な人」と「メディアを通して知った人」

我々は親、友人、教師、恋人といった身近な他者との直接的な出会いだけに留まらず、メディアを通じた間接的な出会いをも経験することができる。しかし、従来の研究において重要な他者とは親、友人、教師を中心とした身近に実在する人物がほとんどであり、メディアに登場する人物の重要性についてはあまり取り上げられてこなかった（家島，2004）。

そこで本研究では、他者との出会いにおいて「直接—間接」という軸を導入する。他者との出会いを「直接的な出会い」と「間接的な出会い」に大別し、それぞれの出会いにおける他者を「身近な人」と「メディアを通して知った人（見たり聞いたり読んだりした人、作品中の登場人物）」とする。調査においては、両者を分けて挙げさせることにする。

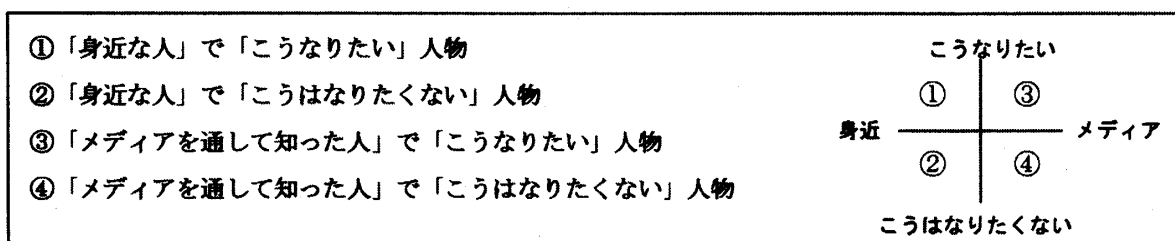
「模範—反面教師」という軸：「こうなりたい」人物と「こうはなりたくない」人物

佐久間（1994）は、大学生の理想自己に関する研究において、理想自己の特徴である「なりたい自己」は単なる願望ではなく、目標に近いものとして認識されていることが考えられると指摘し、同様に「なりたくない自己」も回避目標や行動の基準として認識されていることを推測している。このように、現在の理想自己研究の流れにおいて、理想自己はポジティブなものへの接近とネガティブなものからの回避の両方を含んだ概念として捉えられている（e.g., 安達・菅宮，2000；遠藤，1991）。「こうなりたい」と「こうはなりたくない」は表裏一体であるとも言えるが、理想自己研究においては、正の理想自己が接近対象として、負の理想自己が回避対象として捉えられてきた。他者との出会いによる感化においても、その人物が好ましい人物であれば模範モデルとして認識され、その人物が好ましくない人物であれば反面教師モデルとして認識されることが推測される。

そこで本研究では、影響のタイプにおいて「模範—反面教師」という2つ目の軸を導入する。感化を受けた人物のタイプを「こうなりたい」という接近願望を生じさせるタイプと「こうはなりたくない」という回避願望を生じさせるタイプで大別し、それぞれにおける人物を「こうなりたい」人物、「こうはなりたくない」人物とする。調査においては、両者を分けて挙げさせることにする。

以上のことを整理すると、本研究において求められる「理想・生き方に影響を与えた人物」は、①「身近な人」で「こうなりたい」人物、②「身近な人」で「こうはなりたくない」人物、③「メディアを通して知った人」で「こうなりたい」人物、④「メディアを通して知った人」で「こうはなりたくない」人物、の4種類である。まとめると、図1のようになる。

図1 本研究で求められる「理想・生き方に影響を与えた人物」4種類



2. 目的

本研究の目的は、理想・生き方の研究に「影響を与えた他者」という視点を導入することによって、人がどのような関係にある人物から理想・生き方に影響を受けているのか検討することである。

具体的には、理想・生き方の問題と深く関わる青年期（大学生）を対象に質問紙調査を行い、「身近—メディア」×「こうなりたい—こうはなりたくない」の4種類それぞれの欄に挙げられる人物を明らかにすることである。

3. 方法

調査参加者

関西を中心とした日本各地の大学生・大学院生（学部1回生から大学院博士課程1回生まで）が調査に参加した。人数は206名（男119名、女87名）で、平均年齢は21.4歳である。質問紙は2002年10月下旬から12月中旬にかけて配布・回収された。

調査内容

理想・生き方に影響を与えた人物を、「直接—間接」（他者との出会いのタイプ）と「模範—反面教師」（影響を与えた人物のタイプ）という2つの軸から、4つに分類した。具体的には、「身近—メディア」×「こうなりたい—こうはなりたくない」の4種類に分け、①「身近な人」で「こうなりたい」人物、②「身近な人」で「こうはなりたくない」人物、③「メディアを通して知った人」で「こうなりたい」人物、④「メディアを通して知った人」で「こうはなりたくない」人物、それぞれについて最高3つまで挙げさせた。人物を挙げた場合はそれぞれについて「そう思った理由・詳しい人物説明」を、特にそういう人物がない場合は「そう思う理由」を自由記述によって求めた。

質問紙について

「身近な人」と「メディアを通して知った人」でページをわけ、「こうなりたい」人物、「こうはなりたくない」人物のそれぞれに影響の強い順に「人物1」「人物2」「人物3」の欄を作った。その横に何故その人物を挙げたのかを簡単に記述できるよう、身近な人においては「そう思った理由・詳しい人物説明」、メディアを通して知った人においては「そう思った理由・どのようにして知ったかor作品名」という自由記述の欄を設けた。特にいない場合は、「特にいない場合：そう思う理由」の欄に自由記述ができるようにした。また、「人物2」「人物3」を設けることで、挙げられる人物の種類が増える、「人物1」が唯一挙げられた場合か複数意識されている中で一番に挙げられた場合かを参考にできる、調査参加者が自分の中で複数の候補を順位付けして位置づけるような作業を頭の中ですることによって思いつきによる記入が減る、などのメリットが期待されたので3つまで回答可能とした。しかし、強制的に書かせることがないように、「無理に3つ書く必要はありません」と補足をつけ、さらに目立つようアンダーラインをつけた。

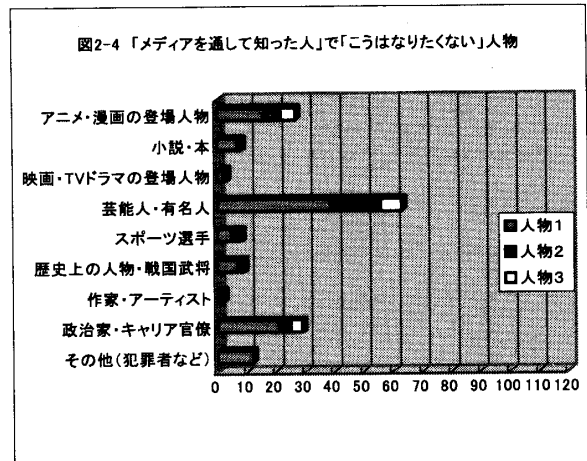
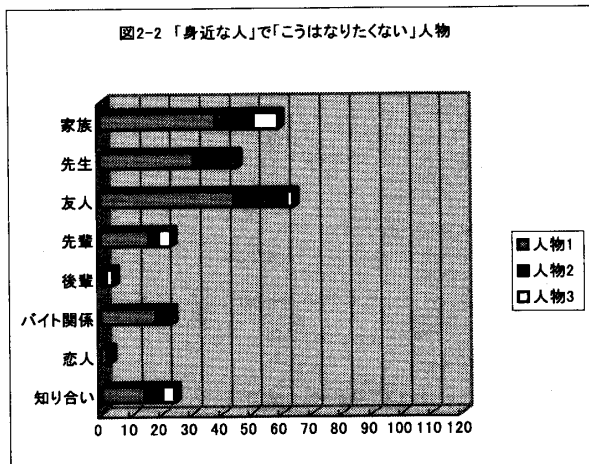
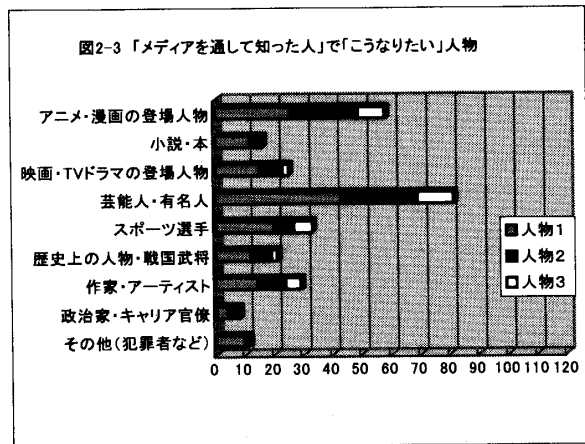
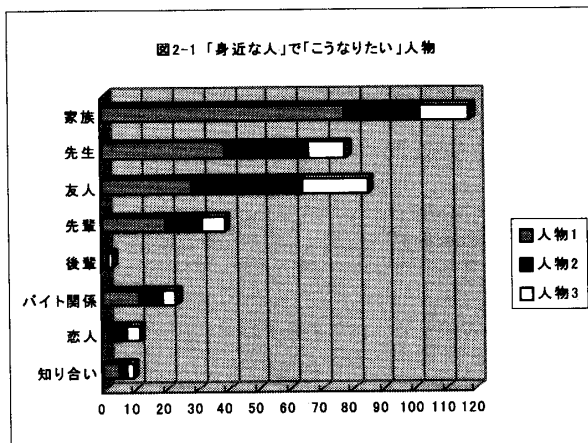
また、予備調査の回答をもとに、予想される具体例とそのカテゴリーを記載した例表を示した。本来ならば、例は提示しない方が望ましいのだが、他者からの影響は自分の中ではっきりと自覚

できていない場合が多く、よほど内省を繰り返している者でなければ、思い出すのが困難であったり、人生を振り返るのに時間を要したりすることが予想されたため、具体例が書いてあった方が想起しやすく調査参加者の負担も少ないと考えて、先行研究および予備調査をもとに具体例とその簡単なカテゴリーを示した例表を質問文の下に記載した。なるべく多彩な具体例を示し、カテゴリー的には予想され得るすべての範囲をカバーしたつもりである。

4. 結果と考察

4-1. 挙げられた人物について

①「身近な人」で「こうになりたい」人物，②「身近な人」で「こうはなりたくない」人物，③「メディアを通して知った人」で「こうになりたい」人物，④「メディアを通して知った人」で「こうはなりたくない」人物，それぞれにおいて記入された人物を先行研究（大野，1995）に倣ってカテゴリー分類した。カテゴリー別に集計して視覚的にわかりやすくするためにグラフで表したものが，図2-1から 図2-4である。横軸はそのカテゴリーとして挙げられた記入数を表す。例えば図2-1を見ると，総数では「友人」が「先生」を上回っているが，最も影響を与えた人物として挙げられた「人物1」のところだけを比較すると，最も影響を与えた人物としては「先生」の方が「友人」より多く挙げられたことがわかる。また，図における各カテゴリーの「人物1」の記入数の総和が，その図が示す人物の欄において何かしらの人物を1人以上記入した人数となる。



「身近な人」 : 図2-1 & 図2-2

「こうなりたい」人物, 「こうはなりたくない」人物ともに「家族」, 「友人」, 「先生」が多かった。模範としても反面教師としてもこの3つが他のカテゴリーに比べて飛びぬけている。研究協力者が大学生であり, これまでずっと学校生活を送ってきた青年であることを考慮すると, 一緒にいる時間の長さが関係しているように思われる。模範においても反面教師においても同様に多く挙げられていることから, 一緒にいる時間が長い人間ほど良くも悪くも影響を与えやすいことが推察される。

「家族」, 「友人」, 「先生」が多く挙げられたが, それ以外のものとしては, "クラブ・サークルの先輩"や"ゼミの先輩"といった「先輩」と, "バイト先の店長"や"バイト先の上司"といった「バイト関係」が多く挙げられた。同時に, 自分より年下である「後輩」は挙がりにくかった。このことは, やはり理想・生き方を学ぶのは自分より長く人生を生きている年上であることを示している。

"図書館の受付の人"や"バイト先の客"といった「知り合い」カテゴリーに関しては, 「こうはなりたくない」人物に挙げられた数の方が多かった。あまりよく知らない人に関してのみこのような結果が見られたことは興味深い。

「メディアを通して知った人」(見たり聞いたり読んだりした人) : 図2-3 & 図2-4

「こうなりたい」人物, 「こうはなりたくない」人物ともに「芸能人・有名人」が一番多かった。「こうなりたい」人物では「アニメ・漫画の登場人物」, 「スポーツ選手」, 「映画・TVドラマの登場人物」など実在・架空の人物を含め様々なものが挙げられていたが, 「こうはなりたくない」人物では「芸能人・有名人」, 「政治家・キャリア官僚」, 「アニメ・漫画の登場人物」以外はあまり挙げられていなかった。「政治家・キャリア官僚」と, 犯罪者や宗教団体の教祖などを含む「その他」は, 「こうはなりたくない」人物においてのみ多く挙げられていた。これらのことから示されることは, テレビで知る実在の人物からの影響が多いこと, メディアとしてはテレビからの影響が最も多いこと, である。これは, 単純に接する頻度の問題だけでなく, リアリティの問題が関係しているように思われる。テレビ映像は自分の目で見た状態に近い映像を提供できるため, 比較的直接的な出会いに近いと言える。そのため他のメディアよりも影響が多いと考えられる。

「身近な人」と違って「メディアを通して知った人」ではほぼ全てが固有名詞で挙げられていたが, 挙げられたものは基本的に十人十色であった。「こうなりたい」人物においては, 4人の人物(少女マンガの主人公, 小説の登場人物, 歴史上の人物, 歌手)がそれぞれ3票獲得したが, あとは個人によって異なる人物が挙げられていた。「こうはなりたくない」人物に関しては, その時期に汚職が発覚した政治家(11票)や化粧の濃い毒舌野球監督夫人(12票), 態度が横暴な当時の首相や某国大統領夫人(ともに5票)などが重複して挙げられていた。「こうはなりたくない」人物において同じ人物が挙げられた理由として, やはりテレビという媒体の要因が考えられる。自由記述の文面から, テレビで見た悪印象や, ニュースで知った悪行から「こうはなりたくない」人物として判断していることが推測されるが, この部分に関しては時事性がかなり影響していると考えられる。

4-2. 男女差について

図2-1から 図2-4を男女別にしたものが図3-1から図3-8である。

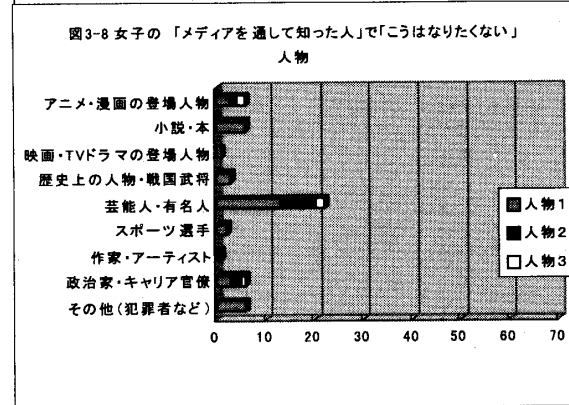
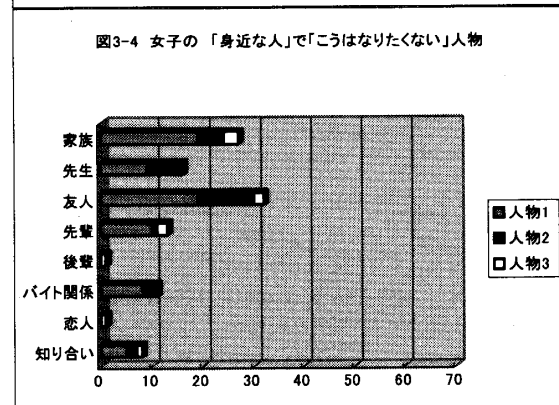
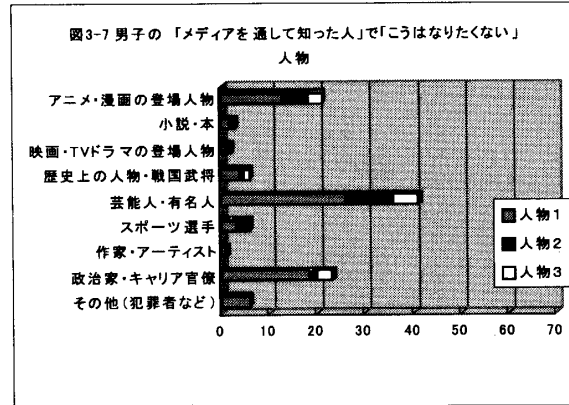
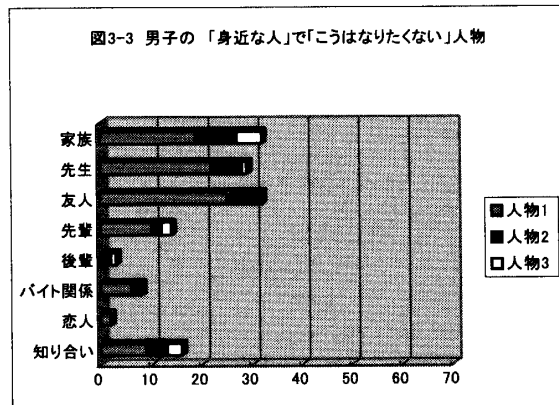
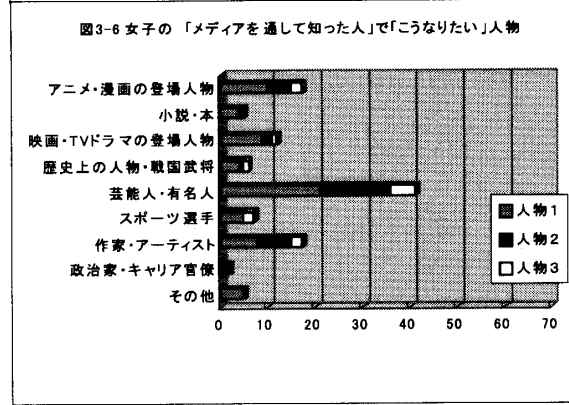
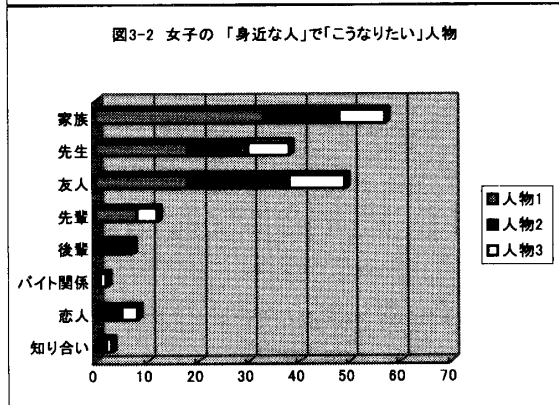
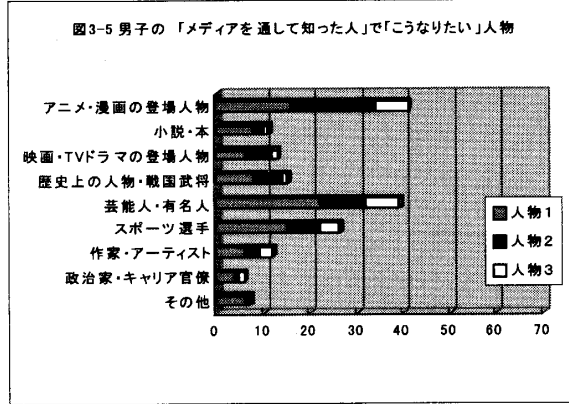
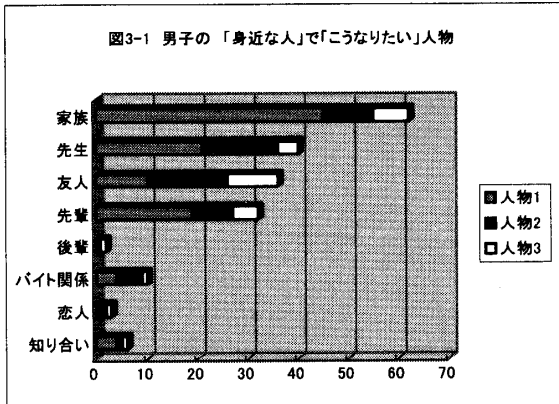


図3-1と図3-2を見ると、男子は女子に比べて「先輩」が多く、女子は男子に比べて「友人」が多い。図3-3と図3-4を見ると、「先生」において差が見られる。「こうなりたい」の方では男女にあまり差は見られなかったが、「こうはなりたくない」においては男子の方が挙げる事が多く、このことは男子のほうが女子よりも先生に怒られる機会が多いという可能性が考えられる。また、恋人を挙げたのは男子よりも女子が多かったが、これは女子に「好きな異性」を挙げる傾向があるという先行研究（大野，1995）と同じであった。図3-5と図3-6を見ると、男子の方が女子より「スポーツ選手」、「アニメ・漫画の登場人物」、「歴史上の人物・戦国武将」を挙げ、女子の方が男子より「作家・アーティスト」を挙げる事が多い。このことは、先行研究（大野，1995）が述べているように、「スポーツ選手」や「歴史上の人物・戦国武将」に男性が多く、女子がモデルを見出しにくかったことが考えられる。図3-7と図3-8を見ると、女子は男子に比べてそもそも記入総数が少ないことが顕著である。

先行研究（大野，1995）において、女子は身近な人（学校の友人、先生）を、男子は実在で自分と少しはなれた人（スポーツ選手や歴史上の人物など）を、生き方モデルに選ぶ傾向があるとしているが、本研究でも同様の傾向が見られた。また、大野（1995）の先行研究は高校生を対象としており、本研究では大学生を対象としているが、二つの調査の結果は、かなり似た傾向が見られる。例えば、男子において「スポーツ選手」、「歴史上の人物」がよく挙げられていることや、女子が「好きな異性」（本研究では「恋人」）を挙げる傾向などは、ほとんど先行研究と同じであった。

4-3. 自由記述について

影響を受けた理由・人物説明

「メディアを通して知った人」で「こうなりたい」人物における自由記述（人物を挙げた理由と人物に関する説明）を分析してみると、外見的魅力や特殊能力を持っていることがその理由として多く挙げられていた。「身近な人」で「こうなりたい」人物においては、その理由の大半が「人格・人柄」に関するものであったのに対し、「メディアを通して知った人」の「こうなりたい」人物においては、その理由の大半が「能力・才能」に関する言及であることが示唆された。すなわち、「身近な人」が挙げられる理由に「内面的魅力」が多く、「メディアを通して知った人」が挙げられる理由に「外見的魅力」が多いことが示された。メディア上に現れる人物とは相互作用がなく、その人物の内面まで深く探ることはできないせい（相互作用の欠如が原因）ではないかと推測できる。しかし、メディアに現れる人物は前提としてそもそも何らかの能力・才能を有した特別な人物であることが多いという点も忘れてはならない。「身近な人」と「メディアを通して知った人」、「人格・人柄」と「能力・才能」の問題は今後明らかにすべき課題として残された。

「こうはなりたくない」人物として挙げられた理由としては、自分勝手に周りに迷惑をかけることが最も多く挙げられた。露骨に外見や才能の無さを理由とする回答はほとんど無かった。しかしながら、単なる感情的な嫌悪に留まり、反面教師として自己形成意識に影響を与えていないように思われる理由も多く見られた。嫌悪の感情が強すぎると理想・生き方には反映されない可能性が示唆された。

特にいらない理由

理想・生き方に影響を受けた人物が特にいらない場合、「そう思う理由」に挙げられた自由記述を検討し、「身近な人」と「メディアを通して知った人」の影響力の違いを考察する。

「身近な人」において影響を受けた人物が特にいらない理由としては、『自分は自分』、『思いつかない』、『そこまでの人はいない』というものが多かった。それに対し、「メディアを通して知った人」において影響を受けた人物が特にいらない理由は、『一時的でしかない』、『共感、感心して終わる』という、影響が一時的なこと（影響の一過性）を指摘する回答や、『自分と遠い気がする』、『所詮は架空の人物』という自分の世界とは違う世界であること（実感不可能性、非現実性）を指摘する回答が多く、ほとんどの人がメディアを通じた間接的な影響は身近な人から受ける直接的な影響ほど強くないことを述べた。しかし、中には『（メディアを通して知った人から）影響は受けていると思うが特に誰という特定はできない』という回答も見られた。このことから、メディアを通して知る人物の数が非常に多いこと、メディアを通して知る人物との関係は広く浅いものであること、などが推測される。「身近な人」からの影響と「メディアを通して知った人」からの影響で、影響の質に違いがあるかどうか今後更に詳しく調べる必要があるだろう。

また、スポーツ選手などに対して『才能面で「こうになりたい」と思うことはあっても人間的には影響を受けていない』という回答も見られた。これは、才能面や外見面で「こうになりたい」と思うことと、人格面で影響を受けることは異なることを示唆している。今回、「メディアを通して知った人」で「こうになりたい」人物において「芸能人・有名人」が多かったが、その理由のほとんどは才能面や外見面であり、単に「こうになりたい」と思っただけの人物が多く含まれていたと考えられる。「メディアを通して知った人」においては特に、理想・生き方という価値観、信念において感化を受けた人物ではなく、優れた容姿や才能に対して羨ましく思った人物が挙げられてしまった可能性が大きい。「こうになりたい」においては人格面と才能面の二つを分けて考える必要があることが示唆された。

「こうはなりたくない」人物を挙げることに強い抵抗を覚えている回答もいくつか見られた。特定の人物を「こうはなりたくない」人物として名指しにすること自体が他者攻撃であるかのようになっているために、「こうはなりたくはない」人物は心情的に挙げにくくなっていることが推測される。このことを示唆するのが、「こうはなりたくない」人物がいらない理由として自由記述に（特に女子によって）多く書かれていた、『嫌な人でもどこかいい面があるはずだから』という回答である。また、『嫌な人のことは覚えてない』、『そのようなモデルは避けようとするから近くにいない』など、そもそもネガティブな人物に（精神的・物理的に）近づかないようにしていることを示す回答も見られた。更に、『嫌な人に近寄ると自分が不快な気持ちになるのであるべく近づきたくない』、『本当になりたくないタイプは思い出したくもない』など、ネガティブなものとの接触が不快感情を生じさせることについての言及も見られた。「こうはなりたくない」人物は嫌悪、蔑視の感情と深く結びついており、他人を挙げること自体に抵抗があるようだが、一度挙げた人物に対しては徹底的な嫌悪と回避の願望が現れるようである。これらのことから、ネガティブな人物に対する意識は抑圧されていることが示された。特に社会において協調的であることが重視される女子にとっては、他者攻撃と思えるような行動はとり難かったと考えられる。

5. 総括

親からの影響

挙げられる人物は多様であるが、最も挙げられた「家族」のほとんどが父親、母親であり、「理想・生き方に影響を与えた人物」として最も多く挙げられるのは同性の親であることが明らかになった。「父親」を挙げた者の70%が男子であり、「母親」を挙げた者の72%が女子だったが、これに関しては、先行研究における「男子は父親、女子は母親を挙げる傾向」（大野、1995）と同じ結果となった。また、父親と母親は特に、「こうなりたい」人物と「こうはなりたくない」人物の両方に挙げられることが珍しくなく、ある部分においては模範モデルとされつつも、ある部分では反面教師モデルとされている親の像が浮かび上がった。しかしながら、自由記述の文面から親を全面的に尊敬して接近対象としていると思われる大学生、全面的に蔑視して回避対象としていると思われる大学生も存在しており、親からの影響には親子関係や親への愛着が大きく関係していることが考えられる。親子関係も考慮しながら、具体的なエピソードでもって親からの影響を考察していく必要がある。

実在と架空の問題

人生において出会う人物やストーリーは必ずしも実在のものとは限らない。その中には架空の人物やフィクションのストーリーが多く含まれる。今回の調査では「直接—間接」（身近—メディア）という軸で大別したが、間接的に知った人物の中には芸能人やスポーツ選手といった実在する人物と、マンガ・アニメの登場人物といった架空の人物が混在していた。更に、実写のドラマや映画における登場人物は、実在の人間が演じているため外面的には実在の人物と言えるが、人格に関して言えばあくまで作られたものであり、ドラマや映画の世界に限定された存在であって現実世界には存在しないため、内面的には架空の人物であると言える。また、マンガや小説の登場人物であっても、歴史上の人物など実在した人間をモデルとした作品の場合、全くの架空とも言い難い。このように、実在と架空の線引きは一筋縄ではいかない部分があるが、実在の人物モデルと架空の人物モデルでは実現可能性（自分が実際そのような人間になれるかどうか）の判断において差が生じることが予想される。実現可能性における実在と架空の差は、その後の接近行動の動機づけに関わってくると思われるが、これらの検証を含め、「実在—架空」の軸について検討することは今後の課題の1つである。

メディアの分類：「可視—不可視」の軸

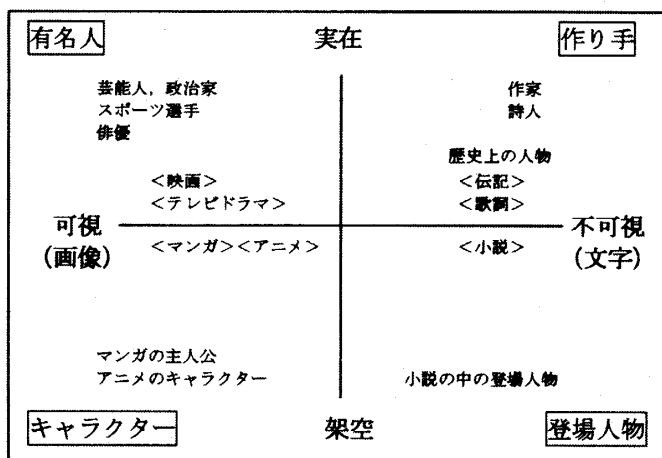
メディアが伝える視覚的な情報には文字と画像の2種類がある。すなわち、メディアは人物の姿が見えない文字メディアと、人物の姿が見える画像メディアに大別できる。しかしながら、今回の調査では文字メディアと画像メディアが混在していた。メディアを整理・分類して再検討する必要がある。探索的にメディアの分類を行なったところ、画像か文字かという観点から「可視—不可視」という軸が見出された。すなわち、メディアを可視（画像）メディアと不可視（文字）メディアに大別できた。「実在—架空」×「可視—不可視」という2軸平面において、人物とくメディアを配置すると図4のようになる。しかし、メディアが伝える情報には聴覚的な情報も含まれる。聴覚的な情報も含めた検討は、今後の課題として残された。

まとめ

「理想・生き方に影響を与えた人物」を「身近—メディア」×「こうなりたい—こうはなりたくない」という2軸から4分類し、それぞれに挙げられる人物とその理由を検討した。その結果、最も多いのは同性の親であり、身近な人では友人と教師、メディア上の人物では芸能人・有名人、マンガ・アニメの登場人物などが多く挙げられた。多様な人物が「影響を与えた他者」として多くあ

げられているが、メディアより身近、反面教師より模範の方が多くあげられていることが示された。①挙げられた人物に「実在の人物」と「架空の人物」が混在していること、②その挙げられた理由に「人格面」だけでなく「才能面」が混在していること、③メディアに「可視（画像）メディア」と「不可視（文字）メディア」が混在していること、が指摘され、今後の課題として残された。これらを改善した更なる調査が必要である。

図4 「メディアを通して知った人」の整理・分類



謝辞

本論文の作成に当たり、京都大学大学院教育学研究科教授やまだようこ先生に丁寧なご指導を賜りました。深く感謝し、お礼申し上げます。

引用文献

浅野智彦。(2000). 自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ. 勁草書房.

安達喜美子・菅宮正裕。(2000). 自己像と自尊感情および自己成長意欲との関連について—理想自己をとらえる際の新たな観点を加えて—. 茨城大学教育学部紀要 (教育科学), 49, 143 - 155.

安藤延男。(1967). 集団力学からみた大学・学生の諸問題 (3) —大学生の価値観 (2) —「生き方」価値尺度による分析. 厚生補導, 16, 64 - 72.

Bandura, A. (1971). *Social Learning Theory*. New York: General Learning Press.

Bandura, A. & Walter, R. H. (1963). *Social learning and personality development*. New York: Holt, Rinehart and Winston.

Cooley, C. H. (1902). *Human nature and the social order*. New York: Charles Scribner's Sons.

遠藤由美。(1991). 理想自己に関する最近の研究動向—自己概念と適応との関連で—. 上越教育大学研究紀要, 10 (2), 19 - 36.

Gergen, K. J. & Gergen, M. M. (1983). Narratives of the self. In Sarbin, T. R. & Scheibe, K. E. (Eds.), *Studies in social identity* (pp.254 - 273). New York: Praeger.

速水敏彦・陳恵貞。(1993). 動機づけ機能としての自伝的記憶—感動体験の分析から—. 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 40, 89 - 98.

Higgins, E. T. (1987) Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319 - 340.

家島明彦。(2004). 理想の自己像とメディアにあらわれる人物像—自己像形成におけるメディアからの

- 影響の重要性について一. *教育方法の探究*, 7, 65 - 73.
- 國吉和子. (2000). 大学生の価値観に関する研究 (I) —モリスの「生き方」尺度による分析—. *沖縄大学地域研究所年報*, 15, 35 - 46.
- Markus, H. & Nurius, P. (1986) Possible selves. *American Psychologist*, 41, 954 - 969.
- Mead, G. H. (1934). *Mind, self, and society: From the standpoint of a social behaviorist*. Chicago: University of Chicago Press. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収 訳. 1973. *精神・自我・社会*. 青木書店.)
- Miller, N. E. & Dollard, J. C. (1941). *Social learning and imitation*. New Haven, CT: Yale University Press.
- 水間玲子. (2002). 自己形成過程に関する研究の概観と今後の課題—個人の主体性の問題—. *京都大学大学院教育学研究科紀要*, 48, 429 - 441.
- Morris, C. (1956). *Varieties of human values*. Chicago: Chicago Univ. Press.
- Ogilvie, D. M. (1987). The undesired self: A neglected variable in personality research. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 379 - 385.
- 大野道夫. (1995). 望む—「生き方のモデル」の現在. *児童心理*, 49 (12), 127 - 130.
- Rogers, C. R. (1959). A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In Koch, S. (Ed) *Psychology: A Study of a Science vol.3 Formulation of the Social Context*. New York: McGraw-Hill. (伊東博 編訳. 1967. *ロージャーズ全集 8: パーソナリティ理論*. 岩崎学術出版社)
- 佐久間勲. (1994). 大学生の理想自己に関する研究 (1). *日本心理学会第58回大会発表論文集*, 126.
- 渡辺尚人. (2000). 「生き方」モデルの喪失. *現代教育科学*, 43 (8), 17 - 19.
- 山田剛史. (2003). 青年期の自己形成に関する研究の概観と展望—現象 (リアリティ) 理解のためのトライアンギュレーション—. *人間科学研究*, 11 (1), 165 - 177.

(教育方法学講座 博士後期課程1回生)

(受稿2005年9月9日、改稿2005年11月28日、受理2005年12月8日)

Influential Persons in Personality Development

IESHIMA Akihiko

This study investigated the people who greatly influence young people, and the reason why they were influenced. Both good (=exemplar) and bad (=person who serves as an example of how not to behave) examples were investigated. The participants consisted of 206 university students (M = 119, F = 87, mean age = 21.4yrs). In the questionnaires, both good and bad examples were selected from familiar people (e.g., parents, friends, teachers, neighbors, etc.) and among people who were known through the media (e.g., TV personalities, fictitious characters, baseball players, historical characters, etc.). The main results were as follows: (1) among familiar people, the parent of the same sex was the most influential person for young people; (2) among famous people and fictitious characters, TV personalities and comic book heroes had a great influence on young people; (3) fewer bad examples were enumerated than good examples; and (4) the reason why young people were influenced was because influential person was a person of character or had a special talent. The findings suggest that both familiar and unfamiliar people and even fictitious characters have a great influence on the personality development of young people.